

令和元年6月18日現在

機関番号：32635

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2018

課題番号：25780365

研究課題名（和文）発達障害者と統合失調症者の生活機能に関する比較研究

研究課題名（英文）Functioning in everyday life in adults with Autism Spectrum Disorders and Schizophrenia

研究代表者

鈴木 さとみ（Suzuki, Satomi）

大正大学・カウンセリング研究所・研究員

研究者番号：00648561

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は多岐にわたる生活機能を評価することが可能なツールである国際生活機能分類（ICF）をベースにした調査票を用いて自閉スペクトラム症（ASD）のある成人と統合失調症スペクトラム（SZD）のある成人の社会生活機能を比較し、成人障害福祉サービスの支援の一助に資することを目的に実施した。結果、定型発達群と比べてASD群とSZD群はICFの上位概念とそれらの各下位領域において日常生活機能が低いことが示され、障がい特性や環境と生活機能の関連について検討が加えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本では成人の障害福祉サービスに自閉スペクトラム症（ASD）を含む発達障がい者が対象として明記された。統合失調症（SZD）とASDのある人の対応では状態の管理や認知、社会生活支援等において異なる点が多くあり、福祉サービス提供者はそれらを認識し支援に生かす必要がある。ASDとSZDのある人の神経生理面や認知・行動面を比較した研究はいくつかあるが社会生活機能や環境面を比較した量的研究は探した限りでは国内外において見当たらない。本研究はICFの概念モデルを用いて、ASDとSZDのある人の生活機能が定型発達の人々よりも有意に低いこと、障がい特性と生活機能の影響の仕方を統計的に示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the current study was to contribute for the supports for adults with Autism spectrum disorders (ASD) and Schizophrenia spectrum disorders (SZD) providing the comparison of functioning of everyday life in the two disorders. The study used the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) which captures detailed classifications in the areas, such as Activities and Participation and Environmental factors. Results: The clinical groups indicated poorer everyday functioning compared with the typically developing controls in the first and second level codes of the ICF. Further, the results shows how autistic, hyperactivity or schizotypal traits and the environmental factors are correlated with the limitation of Activity and Participation in the ICF.

研究分野：障害福祉

キーワード：国際生活機能分類 自閉スペクトラム症 統合失調症スペクトラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、先進諸国において自閉症スペクトラム (以下 ASD) 等の発達障がい診断が増加しており、日本においても成人期障害福祉サービスにおける発達障がい者への対応が課題になっていた。障害者総合支援法下で提供される障害福祉サービスでは障害種別にかかわらず利用者を受け入れることを基本原則としつつも、サービスの専門性の確保のため主たる対象として、身体・知的・精神・障害児の種別の特定が認められている。日本ではこれまで成人の精神障害福祉サービスの対象は統合失調症 (SZD) が主たる対象となってきた経過がある。発達障害については、2016 (平成 28) 年の発達障害者支援法の一部を改正する法律において発達障害者支援における社会参加の機会の確保や社会的障壁の除去、意思決定支援等が障害者基本法の理念に則って明文化され、個々の障害特性に応じた支援と環境調整が求められるようになった。

福祉サービスが拡大する状況にある一方で、SZD と ASD のある人の対応ではコンディショニングの管理や認知、日常生活や社会生活支援など異なる点が多くあり、福祉サービス提供事業者はそれらを認識し支援に生かす必要がある。SZD と ASD の神経生理面や認知・行動面を比較した研究はいくつかあるが、生活機能や環境面を系統的に比較した量的研究は探した限り国内外において見当たらない。

2. 研究の目的

本研究は ASD のある成人と SZD のある成人、コントロール群として定型発達 (TD) の成人に独自作成した国際生活機能分類 (International Classification of Functioning, Disability and Health、以下 ICF) の調査票を用いて調査を行う。ICF は人々の健康と健康に関連する状態や結果、主要な要因について理解し研究するための科学的基礎の提供を可能にするツールとして活用できるものである (1)。ICF の概念モデルを援用することで ASD や SZD のある成人の主観的な日常生活や環境面の困難さの評価が可能となり、彼らへの支援を行う際の 1 つの参考になると考えられる。

3. 研究の方法

ASD と SZD のある成人、コントロール群としての TD の成人に、ICF 調査票、日本語版自閉症スペクトラム指数短縮版 (AQ10)、成人期の ADHD の自己記入式症状チェックリスト (ASRSv1.1)、Schizotypal Personality Questionnaire Brief 日本語版 (SPQ-B) を実施した。研究の趣旨について文書と口頭で分かりやすく説明し、文書にて同意を得られた臨床群 25 名と定型発達群 45 名に AQ と ASRS、SPQ を実施した。そのうち、臨床群では回答が他者記入だった 1 名と ASD もしくは統合失調症の診断名の記載のない者 3 名を除外した 21 名を解析の対象とした。

(倫理的配慮) 本研究は大正大学研究倫理委員会の承認を得て実施された。

4. 研究成果

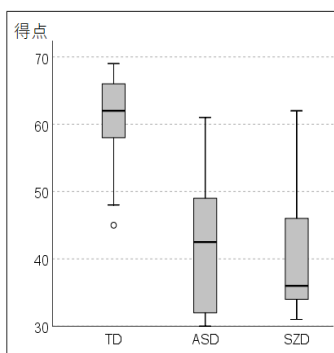
(1) ICF 調査票の作成

ICF 調査票は ICF の第 2 領域の活動 (課題や行為の個人による遂行) と参加 (生活・人生場面への関わり) 118 項目と環境 (人々が生活し、人生を送っている物的な環境や社会的な環境、人々の社会的な態度による環境を構成する因子) 74 項目について専門家と既存の調査結果及び ASD のコアセット (Sven ら 2017) を元に検討し 81 項目を抽出した。

(2) 定型発達群 (N=45) と ASD 群 (N=14)、SZD 群 (N=7) の 3 群の社会生活機能を比較した。

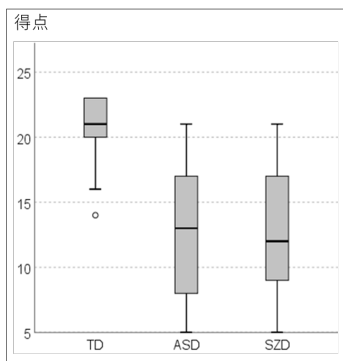
Kruskal-Wallis の検定を行ったところ、ICF の総得点 (図 1) 及び第 1 レベルの領域である活動 (図 2) と参加 (図 3)、環境 (図 4) の領域全てにおいて TD 群と臨床群との間に有意差がみられた。

(図 1) ICF 総得点

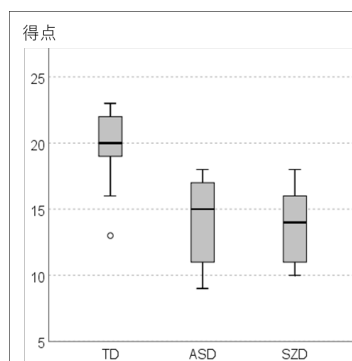


SZD 群と ASD 群は点数の幅が広く分布し全体として低く、個人差が大きかった。第 2 レベルの領域では活動と参加の下位領域では ASD 群は TD 群と比較して「学習と知識の応用」、「一般的な課題と要求」、「コミュニケーション」、「セルフケア」、「家庭生活」、「対人関係」、「主要な生活領域」、「コミュニティライフ・社会生活・市民生活」が有意に低く、SZD 群は TD 群と比較して「一般的な課題と要求」、「コミュニケーション」、「運動・移動」、「セルフケア」、「対人関係」、「主要な生活領域」、「コミュニティライフ・社会生活・市民生活」が有意に低かった。SZD 群と ASD 群とで有意な差はなかった。環境因子では「生産品と用具」、「自然環境と人間がもらした環境」、「支援と関係」、「態度」において 3 群間で有意差が示され、サービス・制度・政策において有意差は認められなかった。群間ごとの比較では ASD 群は TD 群に比べて「生産品と用具」、「自然環境と人間がもらした環境」、「支援と関係」、「態度」で有意に低く、SZD 群は TD 群に比べて「生産品と用具」、「態度」で有意に低かった。SZD 群と ASD 群とで有意な差はなかった。

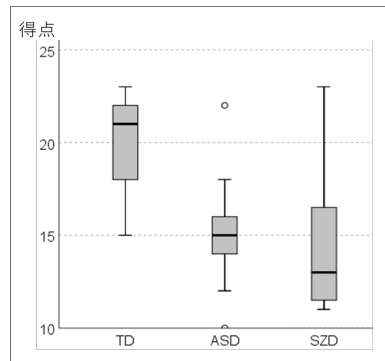
(図2) 第1領域：活動



(図3) 第1領域：参加



(図4) 第1領域：環境



ICF で測定した生活機能の得点の低さが生活上の困難さを表しているとは仮定し、生活上の困難さが自閉症特性や多動衝動性、統合失調症型人格障害（以下統合失調症型）の傾向と関連するののかについて検討した。

Pearson の相関分析を行ったところ、TD 群と ASD 群では ICF 全体の得点が低いほど自閉症特性や多動衝動性、統合失調症型の傾向も高かったが、SZD 群ではこうした傾向は示されなかった。活動因子は TD 群において自閉症特性と統合失調症型の強さと相関を示し、ASD 群において自閉症特性、多動衝動性、統合失調症型の高さとの相関を示した。SZD 群ではいずれの傾向とも相関はなかった。参加因子は ASD 群では自閉症特性と多動衝動性、統合失調症型の傾向と相関を示したが、TD 群と SZD 群ではいずれとも認められなかった。環境因子では TD 群において自閉症特性の強さと相関が認められたが、ASD 群と SZD 群では示されなかった。

なお、下位領域では、TD 群では自閉症特性の強さとの相関は「学習と知識」、「コミュニケーション」、「対人関係」、「支援と関係」において、ASD 群では「課題と要求」、「コミュニケーション」、「対人関係」において認められたが、SZD 群では認められなかった。多動衝動性については TD 群において「学習と知識」、「課題と要求」、「セルフケア」、「対人関係」で相関があり、ASD 群では「課題と要求」、「コミュニケーション」において相関がみられた。SZD 群では「コミュニケーション」において相関が認められた。統合失調症型については TD 群で「学習と知識」、「課題と要求」、「コミュニケーション」、「対人関係」、「支援と関係」で相関があり、SZD 群では認められなかった。

ASD 群と SZD 群において、主観的な環境面に関する認知が活動や参加、自閉症特性、多動衝動性、統合失調症型と関連しているのか検討した。

Pearson の相関分析を行ったところ、ASD 群では、「自然環境」の下位領域については「気圧の変化」は自閉症特性と多動衝動性、「コミュニケーション」の間に、「光の刺激」は「課題と要求」、「地域社会生活」の間に相関が認められた。「支援と環境」の下位領域では「家族のサポート」は「課題と要求」、「コミュニケーション」、多動衝動性と統合失調症型の傾向の間に、「友人のサポート」は「地域社会生活」との間に相関が認められた。「態度」の下位領域では、「家族の態度」は「地域社会生活」との間に、「友人」は「生活領域」との間に、「職場の同僚、学校や趣味の仲間、近所の知り合い」は「学習と知識」、「対人関係」、「生活領域」、「地域社会生活」の間に、「社会や地域のルール・規範や価値観」は「参加」の間に相関が認められた。「サービス・制度・政策」の下位領域では「教育と訓練のサービス・制度・政策」は「生活領域」との間に相関が認められた。

SZD 群では、「自然環境」の下位領域については「気圧の変化」は自閉症特性との間に、「光の刺激」は統合失調症型と「運動・移動」との間に相関が認められた。「支援と環境」の下位領域では「家族のサポート」は「対人関係」との間に、「役所や施設の職員」は「家庭生活」との間に相関が認められた。「態度」の下位領域では、「家族の態度」は「対人関係」との間に、「友人」は「学習と知識」、「課題と要求」、「参加」との間に、「職場の同僚、学校や趣味の仲間、近所の知り合い」は自閉症特性、「参加」、「学習と知識」の間に、「社会や地域のルール・規範や価値観」は「学習と知識」、「課題と要求」、「活動」との間に相関が認められた。「サービス・制度・政策」の下位領域では「労働と雇用のサービス・制度・政策」との間に相関が認められた。

まとめ：今回の調査の結果、ASD 群と SZD 群は ICF の日常生活機能に関する項目のほとんどすべてにおいて TD 群と比べて有意に低かった。

定型発達や ASD のある人では、自閉症特性や統合失調症型の傾向が強いと対人的交流が要求される社会場面において困難さが表出するものの、自身の身だしなみや家事、趣味の活動などでは主観的な困難さは認識されていないことが分かった。なお定型発達群では自閉症特性や統合失調症型の傾向が強い場合、家族や友人など周囲との関係が築きにくいことが分かったが、臨床群では認められなかった。これは今回の調査対象が両群とも適切な支援につながっていることが起因しているためであると考えられる。

ASD 群については、対人コミュニケーションに関連する困難さは自閉症特性や多動衝動性と関連しており多くの既存の研究結果と一致していた。一方、家庭生活や地域・社会生活の困難さは、友人のサポートや態度、家族、職場の同僚や近隣の人などの態度と関連していた。ASD

群では家族のサポートが受けられていないと感じている場合、物事の達成やストレス対処を含む自身の管理、他者との円滑なやり取りといった日常の活動が制限されていることが分かった。また友人のサポートがなかったり家族や職場の同僚などの態度が心地よくないと感じていると地域や趣味の活動が制限され、職場の同僚等の態度は仕事への集中や問題解決、意思決定、職場での人間関係や仕事の達成等に影響していることが示された。

SZD 群については、自閉症特性は生活機能と関連がなかったが、多動衝動性が高いとコミュニケーションに困難さがみられた。また SPQ の「認知知覚」が高いと、気候や気圧、光や生活音などに煩わされやすいこと、「解体」が高いと対人関係で困難さが生じることが分かった。また、SZD 群の中でも自閉症特性の高いと気圧の影響を受けやすく、統合失調型の得点が高いと光の刺激に過敏であり、微細運動や移動に制限を受けやすいことが分かった。友人や近隣の人々との調整が彼らが日々の問題に対処するのを助け、また役所や施設職員の支援が彼らの家事等の家庭生活上の困難を軽減することも示された。なお、「社会や地域のルール・規範や価値観」といった目に見えない社会的態度によって活動が制限されていることも示され、社会的障壁の解消が必要である。

< 引用文献 >

(1) 世界保健機構 (WHO) 国際生活機能分類 国際障害分類改訂版 中央法規、2008、pp5

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

鈴木さとみ、内山登紀夫、統合失調症と自閉症スペクトラムの行動特徴、科学評論社、精神科、査読なし、32 (3)、2018、265-272、

[学会発表] (計 1 件)

Suzuki, S、Fukatsu, R、Nakajima, K、Kuroki、Y. Develop a scale for exploring relationships between activities、participation、environmental factors and quality of life of adults with autism spectrum disorders . Joint World Conference on Social Work、Education and Social Development 2014 . Melbourne、Australia、2014-07-10

6 . 研究組織

(1)研究分担者

該当なし

(2)研究協力者

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。